

文学館だより



令和 8年 3月 1日
若山牧水記念文学館
TEL 0982-68-9511
文貴日高第119号

=若山牧水生誕140年・若山牧水記念文学館開館20年Memorial Year=

企画展「第3期 牧水誕生」開催します 3/6~5/31

生誕140年を迎えた牧水。3年後は没後100年を迎えます。この4年間を通して、現在記念企画展を開催しており、今月から第3期に入ります。

企画展名	牧水43年の生涯 ~ 没後100年の軌跡を辿る		
会期	第1期	「日向若山家の歴史」	(所沢出身の祖父健海が坪谷へ、若山医院開業 済済)
	第2期	「繁誕生」	(繁誕生、田代小川へ、坪谷へ)
	第3期	「牧水誕生」	(短歌と出会った延岡時代)
	第4期	「いざ東京へ! 恋のあなた」	(仮題) 8月開催予定
	⋮		

第3期「牧水誕生」

延岡高等小学校時代

- 恩師 日吉 昇との出会い
- 初の長旅 金比羅参り
- ゆかりの地「延岡城址」「台雲寺」等

宮崎県立延岡中学校時代

- 雅号の変遷 「紅雲」から「牧水」まで
- 直筆「文学ノート」
- 「校友会雑誌」「曙」「野虹」「日州独立新聞」掲載短歌 等



延岡中学校一年
牧水
(明治32年)
中央

若山牧水延岡顕彰会のキャッチフレーズをお借りするなら、「繁が牧水になった町、延岡」時代に迫ります。特に延岡中学校時代は恩師と文学仲間らと出会い、短歌創作に没入し、歌人若山牧水の原点を育む時代です。現存している実物も公開展示します。どうぞ、足をお運びください。

りつゆう

山中律雄氏（第30回若山牧水賞受賞歌人）生家・文学館来訪



牧水生家横夫婦歌碑にて

授賞式翌日（1月30日）、牧水の生誕地坪谷を訪問された山中律雄さん。文学館到着後は、例に漏れず受賞歌集へのサインが待っていました。書き終わるや否や展示室での一般公開となりました。

また、初めて加入された結社が「創作」（牧水創刊）であったご縁から、ご自身の作品が掲載された「創作」を手にした山中さんは、懐かしく大変喜んでいらっしゃいました。



「創作」を手にして



ご自身のパネルの前で

「創作」昭和56年1月号（p121）
新社友紹介 山中律雄 秋田

「創作」昭和56年2月号（p75） 創作詠草
雨あとの暮るる街みゆひとところ酸漿色に空明かりつつ
他2首 山中律雄（秋田）

「創作」昭和56年3月号（p64） 創作詠草
街路樹の影の先端おぼろにて踏む目の前に揺らぎてみたり
他2首 山中律雄（秋田）



奥様と牧水を囲んで

文学館オリジナル新商品できました

短歌手帖

自作短歌を書き留めるもよし、歌人の短歌を書き留めるもよし。記録用に、はたまたプレゼントにいかがでしょうか。

- B6版、20ページ
- 500円（税込）



第1巻月報（1992・10）

3 昔々のお話 大悟法静子

絶版になっている在来の大悟法利雄編「若山牧水全集」（昭和33年、雄鶏社刊）を再刊するのも一理ありますが、今回の現代にそった若者にも魅力ある新編集の牧水全集刊行は大変よろこばしい事で、亡夫利雄も常々「自分の仕事はあくまでも、牧水を一人でも多くの人に理解してもらう為のものであり、そのだんどりをつけて置く事であって、皆が便利に活用してくれればよい事なのだ」と申しておりました。膨大な、60年にわたる自分の研究を資料として博士号を取った学者たちに対しても「それが望む処だ」と言うばかりで、ひたすら牧水を愛するのみの人でした。

前置きはこのくらいにして、この老妻に亡夫「利雄を通しての牧水像」をとのこでするので、かすむ記憶をたどる事にしました。

これは内々の話で、昭和8年結婚後何かの話のついでに、はにかみながら夫利雄がしてくれたんです。

ずっと昔、講談社から「キング」という厚手の大衆雑誌が出ていましたが、同誌で、大正12、3年頃当時活躍していた文士菊池寛や久米正雄その他大がかりのメンバーに依頼して「偉人伝」を書かせたのです。その執筆者の中に牧水もいて、或日「利雄さん!!その内よい事があるよ、お嫁さんの申込みもわんさとネ」と言ったそうです。そして幾日かたった頃、牧水は得たり顔で、届いたばかりの「キング」をあちこちとめくり始めたのです。利雄も勿論そばにいて牧水の顔を見つめていると、その顔が見る見る変わり、ついに怒りだしたのです。「ない!! ない!!」と。

原稿がのっていない、牧水は「キング」の偉人伝に、一介の名もなき青年「大悟法利雄」を書いたのです。そしてその原稿はボツにされたのです。以後牧水は講談社に対して筆を折ったのでした。そうした原稿のボツ事件もあってか？利雄の結婚はかぞえ36歳となり、私をして「創作の分裂の危機に奔走する青年利雄のやぶれ靴が縁」と金婚式に回想の歌を作らしめ、この様な拙文をお目にかけているわけです。

もう一つは姉三苦京子にもかかわる話で、やはり大正13年頃のことですが、京子は上京の途路牧水に逢うべく沼津に立寄ったのです。その頃姉は夫三苦守西と共に北九州の創作支社のリーダー的存在で、夫守西と共に牧水高弟として可愛がられていました。当時沼津の牧水のもとにいた利雄も高弟同士とて京子とは遠慮のない仲間でした。田舎で若かった姉は牧水の家で、「私はお客さんよ!!あなたは書生さんだから私の御飯つぐべきよ!!」とやったのです。姉の言葉に、利雄もそこそこの若者として、「あら京子さん!!何言うの、毎月の創作の歌の選を僕にされてるくせに」とやり返しました。さあ大変北九州は「花と龍」の若松産の姉、喧嘩ばやい手が利雄につかみかかりました。利雄が選をしていると知って屈辱的な気持ちになったのです。

そこで食卓を共にしていた牧水がママアと止めに入り、「京子さんカンニン!!僕が利雄さんにたのんでやっってもらってるのだから云々……カンニンカンニン」となったのでした。利雄の選といえば、話はそれますが、牧水の死を報じた新聞（今の読売大阪地方で）に牧水筆跡として利雄の字が出たのです。と云うのは今の新聞歌壇と違ってその頃は大方の新聞が牧水の選で、酒も煙草もやらず徹夜は平気と云う影武者青年利雄がその新聞の選を一手に引受けていたところから起こった間違いでした。

次の話も大正13年頃のことです。牧水半切即売旅行で戸畑の姉京子の家に泊られた折、例の如く牧水を慕う社友が姉の家を集まって酒宴となりました。その酒の座がしだいに盛りあがったとき、姉夫妻はじめ一同が牧水先生と逢えた嬉しさに感極まってワンワンと大声で泣き出したのです。たのまれて手伝いに行っていた、うちの女中も酒の世話をする台所でもらい泣きしてしまったりと帰ってから話してくれたことでした。そのときの話で、座の中の若い純情青年が「先生、どうしてHさんは先生の親戚なのに第一詠草にしてあげないのですか?」と率直な質問をしたところ、牧水の顔色が急変し「僕は盲ではない、歌を見る目はあるよ」と一喝されたのです。そのときの先生はこわかった、とずっと後にその青年からきかされたことでした。（歌人）

次回は第1巻月報（1992・10） 4 連載・牧水の片々（一） 若山旅人 を予定しています。

牧水先生の一首

折に触れて出会う一首を紹介しています

先生の一途なるさまも涙なれ家十ばかりなる村の学校に

せんせいの いちずなるさまも なみだなれ いえとおばかりなる むらのがっこうに

歌集『山桜の歌』に収められ、旅を続ける途中に出くわした山里の学校の先生と子どもたちを詠んだ歌が11首並びます。

牧水の母校 坪谷小学校は今年度をもって閉校します。在校生ふたりに懸命に向き合う先生方の姿と重なる1首でした。

参照 『若山牧水全歌集 伊藤一彦編』

おこたわり

冒頭掲載 =若山牧水生誕140年・若山牧水記念文学館開館20年Memorial Year= は、今年度末まで掲載させていただきます。